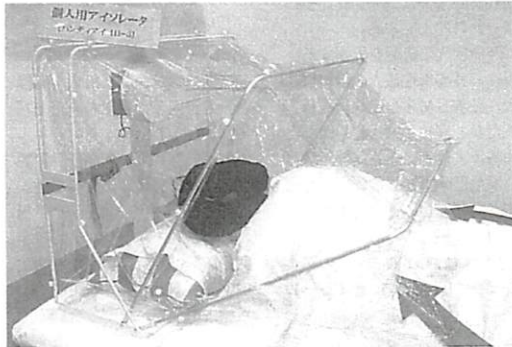


アイソテック 新型インフル用隔離装置

ウイルスなど家で99.97%濾過

新型インフルエンザの感染が拡大する中、医療設備メーカーのアイソテック（東京都中央区）は、患者が自宅療養する際などに使用する個人用の隔離装置「ハンディアイ」＝写真＝を開発、販売を始めた。患者の上半身をフードで覆い、内部の空気を特殊なフィルターで吸引・濾過することで、ウイルスなどの拡散を防ぐ仕組み。家族への感染拡大を抑える効果などが期待できるという。



隔離装置は高さ60センチ、幅70センチ、長さ82センチ。患者が寝ているベッドや布団の枕元に置き、折りたたまれた塩化ビニール製のフードを、上半身を覆うように広げて使う。フードは透明で十分な高さを確保していることから圧迫感はない。

同装置には換気機能が付いており、毎分0.12立方分の空気を緩やかに吸引し、微細なほこりなどを取り除く「HEPAフィルター」で濾過して排気。アイソテックでは、空気中のウイルスやほこりなどを「99.97%濾過できる」と説明している。

開発を担当した感染症対策部

プロジェクトチームの加藤芳博・企画開発アドバイザーは「本来は、個人経営の医院などが低コストで新型インフルエンザ患者用の治療設備を整えられるようにするために開発した」と説明する。医療機関が本格的な感染対策設備を設けようとする、数百万から数千万円の費用がかかるという。

このため今回の装置に先立ち、昨年10月に発売した製品も病院や自治体などに導入が進んでいるという。

新型の装置は、家庭での利用を考慮し、フィルターやフード

をワンタッチで交換できるなど、専門知識がなくても簡単に取り扱えるように改良した。

新型インフルエンザ患者が自宅で療養する場合、部屋の十分な換気などが求められるものの「一般住宅に備わっている設備だけで、寝室内の空気中に飛散したウイルスを除去するのは難しい」（加藤アドバイザー）のが現状。

「ハンディアイ」の価格は10万5000円。一般家庭のほか企業、病院、自治体などを対象に初年度で約3000台の販売を目指している。



大起水産と共同企画した小包のチラシを手に、「挑戦して失敗すること、アイデアも生まれる」と話す青木局長（中央）

黒字化へ「民間」経験生かす

前職は鉄鋼商社の営業マン。2004年、局長に転身したのは、病気の父を見るため転勤が難しくなったとき、「地域に密着して営業できる」と知人に勧められたのがきっかけだ。

利益を出さなくてもよい「ギブ・アンド・ギブ」の郵便局が民営化した今、最優先課題は黒字化だ。民間企業の経験を生かし、黒字化を図れる商品づくりに邁進している。

オリジナル切手をはじめ、「ふるさと小包」の企画で関西企業の活性化を図っている。1～3月には、串カツ「たるま」の一品として人気を集める、大阪名物のどて焼きをレトルトにした小包を販売。2000個売ればヒット商品といわれるなかで約7000個を売り上げ、「簡単に調理できて便利」と、地域のお年寄りや1人暮らしの男性に喜ばれた。

8月には、サケやイクラなど海の幸を詰めた小包を水産加工業の大起水産（堺市北区）と共同で企画し、大阪府限定で発売。安くておいしいと好評ながら、イクラが苦手な女性には受けなかったり、量が多すぎたりと、挑戦することで見えてくることも多いという。

そうした教訓から、「当局の客層やニーズも見えてくるし、客と最も近い所にいる郵便局だからこそ、企業にも提案できる」。民営化の第一歩として、より良い「ギブ・アンド・テーク」の関係を築きながら、局員一同チームワークで臨んでいる。

私の街の郵便局

西成梅南通局(大阪市西成区)

青木 真治局長

カレイドソリューションズなど研修支援

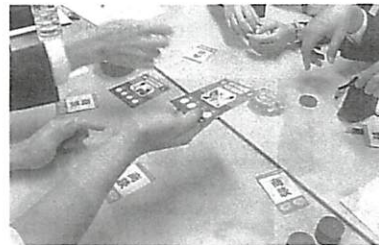
「企業利益」をゲームで学ぶ

企業研修支援などを手掛けるカレイドソリューションズ（東京都杉並区）は、毎日コミュニケーションズ（東京都千代田区）と共同で、企業の内定者をターゲットとした研修用のビジネスゲームを開発した。企業の社員が講師を務め、約3時間のゲームを通じ、研修参加者の利益への理解度を深めるのを目的としている。価格は49万8000円。毎日コミュニケーションズを毎日、初年度20社への販売を目指す。

企業が経費削減を強化していることで、社員研修に用いる講師派遣型ビジネスゲームに対す

る需要も減退傾向にある。そこで開発したのが、究極の選択、を意味する「アルティメットチョイス」と呼ばれるビジネスゲーム。

チームや個人対抗ではなく、全員が1つのゴールを目指すという内容。ゲームを通して、コスト感覚や情報共有の重要性などに気づかせる効果があるという。具体的には各テーブルに課題が記されたシートを設置。参加者は課題解決のためにテーブル内で交渉し、「静観」「移動」「商談」「共有」という4枚のカードから1枚を選んで行動を決定する。結果によってポ



ビジネスゲームを利用した研修の様子。利己的な考え方はゲームが終了しないなどの工夫がされている

イントが得られ、その積み重ねによって会社の利益と個人の評価が確定する仕組み。ゲームには5～24人が参加できる。

「単に自らの利益を追求するだけではゲームが終了しない」（カレイドソリューションズの高橋興史社長）のが特徴。また、自分と会社の利益をめぐって葛藤し、考え方が変わるといった仕組みもされている。活動

すればお金がかかるが、静観するだけでは利益が得られないなど、ゲームを通じて稼ぐことの意味合いを身につけられるようになっている。

入社前の学生のほか、新入社員の研修にも活用できる内容にした。主に人材育成に力を入れたが、費用も抑えたいといった中堅中小企業に売り込んでいく方針だ。

FX活性化へ 共同でサイト

■FXプライムとマスマチュン FX（外国為替証拠金取引）を手掛けるFXプライム（東京都渋谷区）と、株式投資をテーマとしたコミュニケーションサイト「みんなの株式（みんなかぶ）」を運営するマスマチュン（茨城県つくば市）は、FXをテーマとしたコミュニケーションサイト「みんなの外為」を共同で立ち上げる。

FX業界の事業環境は、金融庁の規制強化や業者間の競合激化などで厳しさを増している。FXプライムは、システムの安定性などで競合他社との差別化を図ってきたが、個人投資家の基礎的な知識・教養の向上やFX業界活性化に向け、マスマチュンの「みんなかぶ」運営ノウハウと、FXプライムのマーケット情報や投資分析ツールなどの情報提供力を組み合わせ、相乗効果を創出できないかの検討・協議を進めてきた。

開設するサイトには、経済発表連動型の通貨ペア別の予想投稿機能、取引履歴の取り込みによるトレード分析ツール、システムトレード（バックテスト）機能、日記などのコミュニケーション機能を搭載する予定。

防衛医大助教ら発見

「痛風遺伝子」リスク26倍に

激しい関節痛が起きる痛風のリスクを高める遺伝子を発見したと、松尾洋孝防衛医大助教と高田龍平東京大助教らが米科学誌に発表した。尿酸を排出するポンプにかかわる遺伝子で、変異がある人は最大で、変異がない人の約26倍も痛風になりやす

く、研究チームは痛風の原因遺伝子とみている。

生活習慣病の痛風の発症の仕組み解明や、個人個人に適した治療法や予防法の開発につながる可能性があり、松尾助教は「リスクの高い人は生活習慣を見直して予防につなげることが

できる」と話している。

痛風は体内で作られた尿酸が尿などから排出されず、血中に増えることが発症につながる。研究チームは、細胞の外に薬物を排出するポンプの役割を果たすタンパク質「ABC G2」に着目。このタンパク質が腎臓や腸で、尿酸を尿などに排出することを見つけた。

このタンパク質を作る遺伝子について、防衛医大や東京薬科

大などの痛風患者161人と健康者865人を比較。ポンプが全く働かないか、ほとんど働かないような変異のある人は、患者のうち16人、健康者は8人で、変異によりリスクは約26倍になるとの計算結果になった。

ポンプが半分だけ働くような変異では、リスクは約4倍だった。ポンプの機能を低下させる何らかの変異は患者の約8割にみられた。